
リアル感ゼロツ *

乃亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リアル感ゼロツ

* .

【Nコード】

N7113K

【作者名】

乃亜

【あらすじ】

藍中直希は普通の男の子。

そんな彼を主人公とした小説です。

私をやつともないギャルゲを必死にこんなのかなあつと想像しつつ書いたものです。

つまり！！

この小説は『もしも、ギャルゲを小説にしたら…』という私の暴走心の塊です。

1、緊張感ゼロッ（前書き）

全くの初心者が書いたものなので、文章表現がものすごく雑です…。
読みにくいと思いますがぜひ、読んでやってください！！

1、緊張感ゼロッ

藍中直希。見た目も運動能力も平凡としか言いようのないものだった。

新高校1年の新たな生活の幕開けの日が来た。

そう、今日は私立桜風学園高等部の入学式。

この学園は県TOPで設備もいい。

校則も厳しくなく、基本生徒会に任されている。

直希はそんな校風が憧れでビリだった成績を半年で1位まで持ってきた。

直希いわく

「人間。死ぬ気でやれば何でもできる。」
とのこと。

いったい直希の半年間は何があったのだろうか…触れないほうがいいであろう。

4月10日。心地よい春の日差し。空も快晴である。

「んあー…!!いい朝だっ」

直希が大きく伸びつつ言う。

「さて、制服に着替えるか。」

そう言っつて制服が入っているクローゼットを開ける。

沈黙3秒…

「ないー!!制服がねえよ!」

「つるさいわねえー!!」

突然直希の部屋のドアが勢いよく開いた。

「あ、姉貴!」

「今日、入学式でしょう??いいの、のんびりしてて。」

「だって、制服がねえんだよ。」

それを聞いた直希の姉、藍中麻利。新高校2年は言った。

「あんたのパジャマの下に着ているものは何??それじゃ。あんたも急がないと遅刻するわよ??」

麻利は冷静に言うの家を出て行った。

「下につて…。」

そこに見えたのは紺色のブレザー。

制服だった。

30分後

「やばいつ遅刻だ!!初日からは本当にやばい!!」
ここの角を曲がったら着くところだった。
が、

「きゃっ!!」

直希の前でもても可愛らしい声が鳴った。

「うわっ!?!」

と、同時に直希も奇声を発した。

まあ、ぶつかったのだ可愛らしい声の主と。

「あ、すみません!!大丈夫ですか??」
手を差し出す。

しかし、その手は叩き払われた。

「大丈夫ですか??じゃあ、ないわよっ!!どこ見てるの!?!」

この世のものとは思えない美少女だった。

背丈は小さめ。髪はセミロングの明るめの黒。顔も童顔である。
でも、胸だけは大人だった…。

いや、俺が変な風に見るとかってわけじゃないからなっ!!

「ねえ、聞いているの!?!」

あれ??制服が桜風のだ…。

てか、スカートの中が見えてしまっている。
思わず目をそらす俺。

「ねえつてば……!!」

「あ、あの。見えてます!!」
思い切つて言つた。

「なんのこ……!?!」

途中で気がついたみたいだ。

赤面した美少女は

「……っ!?!」

声にならぬ声を出しつつスタツとたつて制服の汚れを払つた。

そして、こちらを人を殺せるような目でギロツとにらんだ。

俺がヒイツと一瞬引くと

「アンタなんか一回死ねば……?」

と冷たく言い放つて歩き始めてしまった。

直後、俺はわれに返り初日から遅刻を防ごうと必死に走り出したのであった。

1、緊張感ゼロッ（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
次回もよろしくお願いします。

2、運命感ゼロッ(前書き)

今回は更新が早めにできてよかったです。
ぜひ、読んでやってください。

2、運命感ゼロッ

「セーフ…。」

俺、藍中直希は学校にギリギリで間に合った。
どうやら俺は1 - 3だ。

この学園は7組までである。

1クラス30人。

俺は出席番号2番。

まあ、『あ』だから2番はいいとして。

1番は誰だろうか…??と俺は前の席を見る。
が、姿が見当たらない。

「女の子だったらいいなあ…。」
とつぶやいてると。

「まさか、あんたと同じクラスとはね…最悪。」

俺の前方から可愛らしい声と可愛らしくない言葉が聞こえた。

「え…?」

俺の前の席はさきほどぶつかつた美少女だった。

「まあ、何かの縁よね…。とりあえず1年間よろしく。」
なんとこちらに満面の笑みを向けている。

「お、おう。よろしくな…!」

俺も愛想良く笑つてみた。

というか目のやり場に困るのだが。

「あんた名前は???私は相島祐南。」

美少女が聞いてくる。

「俺は藍中直希。」

「そう、直希君ね。さっきはひどいこと言つてごめんなさい。私の
ことは祐南でいいから。」

そのとき、ものすごい勢いで教室のドアが開いた。
ガラガラなんてところじゃない。

ズッガン！！

みたいなの…言葉でいえないほどすごかった。

ドアがついていることが奇跡なぐらい。

「みんな初めまして！！今日からこのクラスの担任をやらせてもらいます。佐藤理沙です。よろしく！！」

どんなゴツいのが入ってくるのかと思えばそれはそれはきれいな女性だった。

メガネをかけスーツが似合っている。

髪は腰まであるようだ。

そして、その髪を高めの位置でポニーテールにしている。

なんとも若そうだ。

「入学式は校長のギックリ腰と理事長の気まぐれにより行いません。

教師とは思えない、学校とは思えない理由だった。

「はあ??？」

「ざけんなよ…。」

「意味わかんない…！！」

などクラス中から反論が聞こえる。

それは当然だろ…。

「黙りなさい！！いい??この学校は決まりなんてものはないの。
全ては生徒会長に任されてるの。」

どんな生徒会長だよー！！

みんなの心の声が聞こえた気がした。

「じゃあ、気を取り直して学級委員決めるわよ。誰かやりたい人。
話の展開はやっ！！」

てか、誰がそんなメンドいことやるか…。

という空気がクラス内を流れる。

そんななか、ピツと手が拳がった。

「お、じゃあ女子は決定!!」

誰だ…??とみんなが目で追う。

その女子は真面目清楚系!!かわいい!!

これまたメガネをかけ、長い黒髪を耳下で2つにまとめている。

「じゃあ…俺。やるっかなあ…。」

と男子たちが言い出した。

まあ、俺はやらないが。

「んーこんな多いと決められないわね…。」

理沙先生も少し悩んでいる。

「じゃあ、めんどくさいから。中沢さん決めてくれる??」

「わかりました。」

中沢とはさきほどの真面目清楚系の女子のこのようだ。

そして中沢さんは小さいが凛としてクラス中に聞こえる声で言った。

「じゃあ。藍中直希君お願いします。」

俺は手を挙げてないから関係ないと思いきを抜いていた。

「直希!!おーい…。」

祐南に呼ばれて我に返る。

「あんだ、選ばれてるよ。」

「えっ!?!」

思わずその場で間抜けな声を出して立ち上がってしまった。

「お、俺…手、挙げてないんですけど。」

俺が気まずそうに言うと。

「え……すみません。でも、直希君ならやってくれるかと…。」

直希君???てか、なんで俺の名前知ってるの??

どうやら気持ち顔に出してしまったらしい。

「覚えてない??中沢瑠璃。小学校で仲良かったじゃない。」

中沢瑠璃!!あのころは地味にでいじめられてた。

こんなかわいくなるものなのか…!?!?

「お、仲いいみたいね！！じゃあ、男子も藍中君で決定！！」

そして、俺の新学校生活が始まった。

2、運命感ゼロッ（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
次回もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7113k/>

リアル感ゼロツ * .

2010年10月24日23時24分発行